

きさの型ではなく、小半紙の寸法の型で漉いていた。そのため朝早くから夕方までこつこつと紙漉きをし、一日に六〇〇枚以上漉かないことには一人前に飯が食べられなかったという。

しかし、この時代が吉野の手漉き和紙業界の最盛期だったと福西さんは語る。なぜなら、時代はやがて大きな荒波に飲まれることになるからだ。

時代の潮流

「支那事変から大東亜戦争へと戦いが激しくなってくると兵士として男手がとられていきますから、だんだん漉き屋の数が減って終戦直後には漉き屋はおよそ四〇軒ほどになりました。

終戦になり満州や南方から復員して帰ってきた漉き屋の方々は、当時下市の割り箸産業が流行って人が非常に手不足していたものですから、こんな田舎なら材料や製材所はいくらでもあるし箸が儲かるんだつたら転職しようということ、ずっと箸にかわっていったんです。だから四〇軒だったのが、またさらに半数近くに減ってしまいました」

敗戦による戦争の終結が日本人のものの価値観を大きく変えた、と福西さんは言う。

「そんなときに親戚の人まで割り箸をやりだしました。すると『お前もう紙せんと箸せえ。今いい機械でけてつてな、えろうナタ使うこといれへん』と言つては勧めにくるわけです。『これほど利潤がええ』と毎晩のように来ました。おまけに私たちの年代であっても、田舎の家業にしがみついて暇なしに働くことを馬鹿にする人もありました。だから私もあやめ池遊園（平成十六年六月に閉園）ができた頃そこへ働きに行こう思つたんです。

そしたら父にえらい剣幕で叱られました。『こつからどないして行くんど。そんなところに毎日行こう思つたら暗いうちから家を出て、上市駅まで自転車踏んで、上市駅から汽車に乗って行って、働いて帰ってくる生活や。そして夜九時にも一〇時にもなる。そんなもん一年三六五日よう続けるか』と。それだったらと、祖父に『おじいさん、あの小さい型やつたら俺はとでも後継ぎようせん。よそのみたいにな』有名な和紙の産地である土佐にしても美濃にしても、すでに大きな型で漉いていました。『それをいっぺん親父と見に連れて行つてくれ』とお願いをして、終戦になつたどさくさの高知駅までガタガタのプロペラ飛行機に乗つていっ



て、そこから目的の地まで汽車で試験場まで行つて視察をしてきたんです」

しかし、その大きな型でやり始めた半年間はほぼ無収入だった。イメージする厚さにしたいと思つても、真ん中のほうは出来ながら片方は薄くなつてしまう。同じように竿で吊つてあるのに均等にならず和紙づくりの師である父や祖父になじられることも度々だった。「こんなもん叩き割つて外に働きにいったるか、と何回思つたかわかりませんが、と福西さんは冗談まじりに語る。

「それでも、いよいよやるとなつたら少しでも生活の支えにしなければいけません。しかし、やり方は同じでも、